

兵庫県における *Olenecamptus* 属 カミキリムシ 3 種の分布について

(兵庫県産甲虫相資料・86)

高橋 寿郎

Olenecamptus 属のカミキリムシで現在兵庫県に分布するのは 3 種である。そこで県下における 3 種の分布についてながめて見ることにしたい。

本文を草するにあたりタカサゴシロカミキリについて色々便宜を与えて下さった三木 進、小倉 滋両氏に厚く御礼申しあげる。

1. *Olenecamptus clarus* Pascoe

ムネホシシロカミキリ

本種は Pascoe によって 1859 年北支那産でもって新種記載されたものである (Trans. Ent. Soc. London, (2)V, P. 44)。その後名和梅吉氏が日本から記録していると (昆虫世界, Vol. 13, No. 148: 501, pl. 24, f. 2, 1909, 據, 草間, 1973)。この文献は見る事が出来なかったので産地を何処何処掲げているのかわからない。1928 年に鹿野忠雄博士は台湾 (新竹州大溪郡ピヤナン産) から記録された (Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, Vol. 18, No. 95: 122)。1933 年には松下真幸博士が朝鮮京城を産地に加えられた (Beit. Kennt. Ceramb. Jap. Reichs. P. 352)。そして 1937 年関 公一氏は北海道産の本種を図説された (昆虫界, Vol. 5, No. 40: 1-4)。その際本州に分布するであろうとされているが分布に本州, 四国, 九州は出ていない。1940 年には平山修次郎氏が朝鮮京城産標本 (21-VII-1938) を原色図説されたが分布に本州, 四国, 朝鮮, 台湾とされ何故か北海道が入っていない (原色甲虫図譜, pl. 48, f. 20, p. 152)。同じ年 (1940) の水戸野武夫氏の "日本産鞘翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科" での産地でも本州, 四国が入っていないし、1946 年の関 公一氏による新日本産天牛科目録にも本州, 四国が入っていない。

その後林 匡夫博士の図鑑 (原色日本昆虫図鑑, 甲虫編, 1955。図説されたのは朝鮮赴戦高原産 VII-1940) では日本全土とされ大林一夫氏の図説 (原色昆虫大図鑑, 第 2 巻, 甲虫編, 1963) の分布も同様である。草間慶一博士の報文で対馬が加わった (日本産カミキリの生態と分布一覧表, 1973)。最近の図鑑, 小島圭三・林 匡夫両博士著原色日本昆虫生態図鑑, I. カミ

キリ編 (1974) (図説は福岡県星野村産, ♀, VI-1964) では日本全土・対馬・朝鮮・中国北, 中部・東シベリヤとなっており現在この分布と考えられる。可成り広く分布している種であるがそれ程多く産する種ではなさそうである。お隣の岡山県でも少い種とされている (岡山県の昆虫, 1978)。朝鮮にも少い様で "韓国昆虫分布図鑑, 1978" にも本種の産地は余り記録されていない。

兵庫県下に於ける本種の記録は山本義丸氏の氷上郡神楽 (lex., 13-VI-1951, M. Nakajima leg.) のものが一番古いと思われる (1958), それから高橋 匡氏によって出石郡出石町が記録された (12-VII-1961, 1963)。筆者は氷の山々麓福定の民宿の電燈に飛来した 1♂ を採集 (27-VII-1956) これを記録した (1964)。氷の山ではその後辻氏 (16-VII-1971, 1972), 遊磨氏 (1♂, 21-VII-1971, 1972) の記録がある。小倉氏も福定で採集しておられる (7-VIII-1980)。

以上が現在筆者の知り得た兵庫県下での記録全部である。最近鳥取県八頭郡尾際に貯木場周辺のクワの葉裏にとまっている可成の個体が採集された記録がある (山地, 1979)。県下でも他にもっと産地があるものと考えられる。食樹としてはトウグワ, クワが知られている (小島圭三・岡部正明: 日本産カミキリムシ食樹総覧, 1960)。

2. *Olenecamptus cretaceus* Bates

オオシロカミキリ

本種は Bates により 1873 年新種記載されたものである (Ann. Mag. Nat. Hist., (4)XII, p. 314, 1873)。その原記載には "One example" とのみで産地に就いては何等明示されていない。1973 年の草間慶一博士の目録には本種の模式標本は兵庫 ♀ [英博?] となっている。尤も同博士の 1971 年発表された報文 "ジョージ・ルイスの足跡について" (月刊むし, No. 8, 9, 1971) には 1♂ 産地不明となっている (1959 年の京浜昆虫同好会・新しい昆虫採集, 下. の "日本産カミキリ類生態と採集一覧表" にも原産地兵庫となっている)。Bates の論文は、G. Lewis の採集品に基いて発表され

たものでその初めに“Mr. Lewis collections were made chiefly at Nagasaki, Osaka and Hiogo”となっているのでこの中のものであると思われる。尤も筆者が戸沢信義氏から御借りしてコピーさせて頂いたBatesの原記載は神戸に在住していたJohn, E. Lewisの蔵書のようにペンでMaiyasanの書き込みがあるが之が何を意味しているのか一寸わからない。

Batesが、1884年に発表した日本の天牛の追加篇 (Longicorn Beetles of Japan. Additions chiefly from the later Collections of Mr. George Lewis, and notes on the Synonymy, Distribution, and Habites of the previously known Species., Journ. Linn. London, Zool. X VIII : 205-262, pl. 1-11) にも何も言及されていないし同じく1879年 London で発行された“日本産甲虫目録”(A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago) にも産地は書いてない。1887年発行の、Schonfeldt. H. v. の“Catalog der Coleop. Jap.”でははっきりとHiogoとなっている。

1930年には横山桐郎博士の“原色日本の甲虫”に美しい本種を図説され本州に産するとされている(pl. 6, f. 7, p. 45, 1930)。1934年には神谷一男・安立綱光両氏の“原色甲虫図譜”にも分布を本州として図説されている(pl. 36, f. 1, 1934)。この2書は本種の命名者名をPascoeと間違っている。その後1937年には平山修次郎氏の図説(原色千種昆虫図譜, pl. 72, f. 7, p. 161, 1937, 原色甲虫図譜, pl. 42, f. 7, p. 129, 1940, 図示されたのは福岡県太宰府産♂, 12-VIII-1936)で九州の分布が初めて記録された。水戸野武夫氏の“日本産鞘翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科, p. 150, 1940”では分布は日本(本州・四国), 朝鮮・中支那となっている。こゝで初めて分布に朝鮮・中支那が入っている。そして九州が入っていない。また同氏による“日本昆虫図鑑, ♀, p. 1241, f. 3575, 1950”の図説もある(分布は前記目録と同様)。1946年の関公一氏の“新日本産天牛科目録, p. 86”(分布は水戸野氏と同じ)にも収録されている。

戦後は林 匡夫博士の図説(原色日本昆虫図鑑, 上, 甲虫編, p. 55, f. 1204, p. 173, 1955, また亜種 ssp. *intacta* Breuningが日光から報告されているとあり分布は本州, 四国, 九州, 朝鮮, 中支東部となっている。図示されたのは大阪市田辺産, VIII-1940), 大林一夫氏の図説(原色昆虫大図鑑, 第2巻, 甲虫編, pl. 153, f. 7, p. 306, 1963. 分布は本州, 四国, 九州, 支那となっており m. *intacta* Breuningがあるときされている)。小島圭三, 林 匡夫両博士の図説(原色日本昆虫生態図鑑, I. カミキリ編, pl. 44,

f. 1, p. 137, 1974. 図示されたのは高知県名野川産VI-1968, 分布は本州, 四国, 九州, 対馬)等々がありその間に1959年の“日本産カミキリ類の生態と採集法一覧表, p. 431”(新しい昆虫採集, 下)に分布は本州, 四国, 九州, 対馬, 朝鮮, 中支那を掲げ亜種 *intacta* Breuningが日光で採集されているとある。併し1973年の草間慶一博士の“日本産カミキリの生態と分布一覧表, p. 119”(新しい昆虫採集案内, III)には台湾に亜種がいるようになっていて本州での亜種には言及されていないし、分布も朝鮮? 中支那? には疑問をつけておられ、本州, 冠島, 四国, 九州, 対馬となっている。本州は横浜, 飛騨, 近畿などと記されている。

以上から現在本種の分布は本州, 冠島, 四国, 九州, 対馬と考えられる。台湾には固有の亜種ssp. *marginatus* Schwarzer, 1925が分布している。一番北の記録としては群馬県多野郡新町〔♂, 17-VII-1952, 小倉住夫, 月刊むし, No. 3, 1971〕というのがあるが日光産の亜種があるようだからこちらが北になると考えられる。

本種もそれ程多い種ではないと思われる。食樹はムクノキ, クワが知られる(小島圭三・岡部正明, 1960)。一般には電燈に飛来するものが採集出来ると報告されているものが多い。

兵庫県下で実際に採集された一番古いのは小林桂助氏の自宅のペランダで採集されたものである(1931年7月採集。きべりはむし, Vol. 7, No. 1 : 14, 1979)。たゞ記録ということになると関 公一氏の1933年のものが一番古いことになる(住吉村? 沢野芳介氏採集, 昆虫界, Vol. 1, No. 4 : 425, 1933)。次いで同氏の“京阪神を中心とした天牛相”(昆虫界, Vol. III, No. 18/19 : 369-378, 1935)にふくまれているがこちらの方は場所が明示されていない。1940年には筆者が六甲山麓森本山上で級友福永安郎君の採集(lex., 15-VI-1940)した本種を記録した(昆虫世界, Vol. 44, No. 518 : 318, 1940. 学名は神谷, 安立両氏の図鑑によったので命名者名をPascoeとしている。関氏の1933年の報文もそのようになっていた)。再び関 公一氏は1941年に六甲山を記録された(昆虫界, Vol. 9, No. 89 : 453, 1941)。その後柴内俊次, 中畔史雄の両氏は住吉村と御影で溝口宏二氏が採集(VI-1949)されていることを報ぜられた(神戸虫便り, 札幌昆虫同好会々報, Vol. II, No. 1 : 14, 1950)。1972年には辻 啓介氏が湯浅浩史氏採集の神戸明泉寺(長田区)産の標本の図説と共に同地では電燈に毎年数頭づつ飛来することを報告されている(兵庫県のカミキリムシ, 月刊むし,

No.10:17, 1972)。芳賀 馨氏は神大付中校庭産の *lex.* を写真で記録しておられる (14-VII-1973, 芳賀, 1975, 1977)。

筆者はまた神戸生物クラブの鑑定会の席上神戸市の小学生 (山本勝也君) が中央市場で採集したと言う美しい標本を持参されたのを検した (1-VI-1974, 採集)。三木 進氏は1979年8月23日1♀を神戸市内北野天満宮境内で採集されている (きべりはむし, Vol. 7, No.2:30, 1979)。

以上が本種の兵庫県の今迄の記録で不思議なことに神戸市内だけが知られていて他の地に全く記録がないという現象を呈していた。ところが小倉 滋氏はこの種を美方郡浜坂で採集された (1♂, 30-VII-1978)。非常に離れた地点での採集でこれまた大変貴重な記録であると共に本種の県下の分布に新しい課題を提供してくれた情報である。尚氏は食樹の1つにネムではないかと疑問をなげられているのも本種の生態解明上の手がかりになると思われる (きべりはむし, Vol. 7, No.1:20, 1979)。

3. *Olemocamptus formosanus* Pic

タカサゴシロカミキリ

本種は Pic が、1914年台湾産で記載された種である (Mat. Longic. Vol. X, No.1:19)。1934年に神谷一男・安立綱光両氏は台湾産を図説された (原色甲虫図譜, pl.42, f. 4)。関 公一氏は本州から初めての記録を須磨一の谷産 (*lex.*, 5-VII-1932) でされた (昆虫界, Vol. 7, No.64:307-310, 1939)。その時小林桂助氏が大阪でも採集していると記しておられるが詳しいデータは無い。その年筆者は神戸市兵庫区烏原貯水池畔で室井 緯博士と一緒に採集に行った際1♂ (20-VII-1939) を得報告した (昆虫界, Vol. 7, No.70:787, 1939)。また同年増田 寛氏も高取山での産を報ぜられた (2 exs., 12-VII-1939) (虫の世界, Vol. III, No.5/6:94, 1939)。1940年発行された水戸野武夫氏著の "日本産鞘翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科" では本種の分布は台湾, 琉球 (徳之島)。日本 (屋久島) となっていて本州での産は記録しておられない。同じ年平山修次郎氏は異常型として広島県尾道産 (VI-1936) を原色で図説された (原色甲虫図譜, pl.48, f. 24, P. 153, 1940)。

1941年には関 公一氏が前に本州から初めて記録された須磨産の1♂をタイプとして本州亜種 *ssp. hondoensis* Seki を記載された (昆虫界, Vol. IX, No.89:453)。その当時広島県尾道では可成り多く産することが報告された (大林一夫, 昆虫世界, Vol. 46:79-80,

1942)。

戦後いち早く関 公一氏は "新日本産天牛科目録" を自刊された。当然タカサゴシロカミキリ *O. formosanus*, 日本 (九州?, 屋久島?)。琉球 (徳之島), 台湾, 本土亜種 *ssp. hondoensis* Seki, 日本 (本州, 九州?) に分けて取扱っておられる。この本土亜種としての取扱は中村慎吾氏が一度使用されている (ニュー・エントモロジスト, Vol. IV, No.1/2:38-44, 1955)。

1955年発行された近畿甲虫同好会編 (カミキリムシ担当, 林 匡夫博士) "原色日本昆虫図鑑, 甲虫編, 全増補改訂版 (pl. 55, f. 1207, P. 173)" において初めて本種の学名を大陸産の *O. octopustulatus* Motschulsky (in Schrencke, Reisen in Amurlgade, II, Coleop., P. 152, pl. X, fig. 3, 1860, Amur "Ibidimorphum") の亜種としての取扱をされた。この学名の使用はその後本種の生態関係の報文には使用されており草間慶一博士の報文もその様に取扱っておられる (新しい昆虫採集案内, III, 1973)。

1963年に発行された "原色昆虫大図鑑, 第2巻 (甲虫編)" で大林一夫氏は *O. formosanus* と別に *O. octopustulatus* Motschulsky シロモンホソカミキリを図示され分布に本州, 九州, 樺太, 朝鮮, 満州, 北支那, 蒙古, 東シベリヤを掲げておられる (大林氏は樺太小沼産のもので図説もされている。虫の世界, Vol. 4, No. 1/2, pl. 3, f. 4, p. 6-7, 1941)。

1974年の小島圭三・林 匡夫博士の "原色日本昆虫生態図鑑 (I), カミキリ編" (pl.44, f. 4, p. 137) 並びに1975年 "学研中高生図鑑, 昆虫, II, 甲虫" (p. 136, 303) (竹中英雄氏担当) では従来通り *O. formosanus* Pic を使用されている。

大林氏が図説された *O. octopustulatus* と1978年の "韓国昆虫分布図" に図説されたもの、小島・林両博士の図説された広島県帝釈峠産 (VI-1962)(1974), 1976年発行の松本むしの会編 "長野県のカミキリムシ" (P. 200) の写真、1979年湯沢寛久氏の報文 (月刊むし, No. 102:38) の写真等を見た場合斑紋だけからは別種のような感じを受けるが標本を見られないのでよくわからない。本報文では小島・林両博士の処置に従っておく。

長野県産のものはズミから採集されている。*O. formosanus* の方はノグルミ。サワグルミ, ウリハダカエテ等が食樹として知られている。

さて本種の兵庫県における分布であるが、戦前は筆者がその後鳥原で2♂, 2♀を採集した。鳥原は戦後採集出来ていない。戦前あったノグルミが伐られたからだと思う。戦後も兵庫県下での産は必ずしも多くな

かった(広島・岡山両県には多くいるようである)。産地から見て海岸線沿に分布している種類のようなものである。このことは岡山、広島両県でも同じような傾向にあるようである。オオシロカミキリと同じ様に日本海側の香住という記録がある。日本海側の調査の要がおいにある。

1979年三木市内で得られた材から羽化した本種6exs., を三木 進氏から見せて頂いた(内1♂恵与さる)。他にも5exs. 程羽化したと。さらに三木市の小倉 滋氏宅を訪問、全じく三木市内で採取されたノグルミを見せて頂いたが(1979年6月23日)。多数の本種が羽化しており勝手に逃げてゆくものもあったが小倉氏も余り標本にしてもと2~30exs. 位を標本にしておられるようであり、筆者も同氏の御好意で生きた12exs. を頂いた。とにかくこの様に多くの本種が僅か数本のノグルミから羽化するのに野外での採集ではなかなか困難である。余談ではあるが当日同じく三木市内採取の材より羽化採集されたチャイロホソヒラタカミキリを10数頭見せて頂き内1ex. 御恵与頂いた(6月1日採集)。本種も今迄県下での産が余り知られていなかった種である。

一応兵庫県下の記録を全部記しておく。

津名郡津名町大町〔堀田, 1971〕。三原郡諭鶴羽山〔久松, 1974〕。洲本市下加茂, 先山〔堀田, 1979〕。芦屋市〔巖〕。神戸市布引〔柴内〕。鳥原(1♂, 20-VII-1939, 2♂, 2♀, 11-VII-1941)。高取山〔増田, 1939。鳥居, 1962〕。三木市福井〔三木, 1978〕。三木市内(1♂, 3-VI-1979, S. Miki leg., 13exs., 23-VI-1979, S. Ogura leg.)。加西市畑(3♂, 17-VI-1974)。多紀郡円南町竜蔵寺町〔辻, 1964〕。水上郡神楽〔山本, 1958〕。城崎郡香住〔新しい昆虫採集, 下, 1959〕。宍粟郡波賀町赤西〔4exs., 22-VII-1979, Miki & Hatanaka leg.〕

本種の幼期, 生態に就いては黒田裕一氏(昆虫学評論, Vol. V, No. 1: 41-46, 1950)。中村慎吾氏(ニューエントモロヂスト, Vol. IV, No. 1/2: 38-44, 1959., げんせい, Vol. IV, No. 1/2: 54-55, 1957)。小島圭三・岡部正明“日本産カミキリムシ食樹総覧”(1960)の夫々貴重な報文がある。

香川県小豆島(小豆郡池田町)においてもシイタケ栽培に使用されているノグルミのほだ木にひどい害を与えていることを報告されている(げんせい, 18: 5-8, 1968. 21: 8, 12, 1970)。

本種の分布は台湾から北へ南西諸島(種子島, 屋久島, 奄美大島, 徳之島)。四国, 九州, 対馬, 隠岐島, 本州となっているが、本州では飛騨地方, 大阪府, 兵

庫県, 岡山県, 広島県下となっている(新しい昆虫採集, 下, 1959, P. 430. 但し本書では*O. octopustulatus*の亜種として本種を扱っている)。(12-X-1980)

(S. 45: TOSHIRO TAKAHASHI

神戸市

(付記)

オオシロカミキリの兵庫県下で採集された一番古いのは小林桂三氏採集の六甲の小林氏自宅のベランダの燈火にきたものであるが文献上での記録の一番古いものは関氏の報文であるとしたが之は誤りで文献上での記録も小林桂三(賢三)氏の報文“大阪附近の天牛”の中で記録しておられる方が古い(関西昆虫学会々報, No. 3, p. 77, 1932), 従って名実共に本種の県下で一番古い記録は小林桂三氏採集のものである。

またタカサゴシロカミキリの近畿、中国地方日本海側の記録として兵庫県の例ではないが島根県日御崎で本種を数頭得たという記録がある(藤村俊彦, 新昆虫, 10巻, 5号, p. 21, 1957)。

9月に羽化したツマキチョウ

広畑 政己

本種の飼育個体の中に、頻度は極めて少ないが、翌春羽化せずに、翌々春に羽化する個体のあることが報告されているが、この度羽化したものは越冬をしないうでその年の9月に羽化したものである。

この個体は、1980年4月26日に兵庫県神崎郡福崎町の市川堤防に生えていたハクサンハタザオに産卵されていたもので、イヌガラシで飼育をし、蛹化したものである。

蛹化後すぐ冷蔵庫に入れ、8月下旬までそのままの状態で保管していたが、低温期が約3ヶ月あったので、秋に羽化するかもしれないと考え、8月下旬に冷蔵庫から出して室内に置いていたところ、9月23日に♂が羽化した。

個体は後翅が完全に伸びなかった程度で、斑紋などは普通の個体との差異はない。

種を存続させるには、幼虫が日長や温度などの外的要因をまちがいに読み取り、最も適切な時期に羽化しなければならないわけであるが、本種の場合は、何ヶ月かの低温期を経過し、その後羽化に必要な温度が得られれば羽化するというメカニズムが組み立てられているように思える。しかし、低温処理したのは1例でもあり、この推測は間違っているかもしれない。

いずれにしても秋に羽化した例は珍しいと思われるので報告する。

(S28: MASAMI HIROHATA 姫路市)